



ヴァイオリン・レッスン・ルーム

巨匠の伝言

第63回

弓先のコントロール
イザイ：エクスタシー①

ヴァイオリニスト 木野 雅之
日本フィルハーモニー交響楽団ソロ・コンサートマスター

URL: <http://www.masakino.com/>



弓先のコントロール

弓の使い方についての勉強は、このコーナーでも以前から何度も繰り返し行っているが、その全てを説明することは到底不可能である。弓の使い方の中でも、今回は「弓先のコントロール」について、少しおさらいしたいと思う。

弓にはいろいろな役割があり、特に音色を作る上では大変重要であることは知っているであろう。そして、リズムを作る上でも必要不可欠なのでしっかりとコントロールすることが大切なのである。

その中でも弓先は跳ばず技術、即ち、スピッカートをすることは絶対にないのだが、*pp*でのトレモロなど、細かい動作の働きに必要な音量やリズムのバランスをしっかりとマスターすべきである。その為にはまず、右手が真っ直ぐに伸びた状態で、弓の本当に先の方でも弾けるように用意すること。その際、余分な力を入れず、手首が曲がらないように注意すること。

アップ・ボウのときと、ダウン・ボウのときに、同じように繰り返し発音できるか、自分の

手の動きや、癖にも注意を払い、音をよく聴くこと。決して最初から強く弾く必要はない。ムラをなくし、まずは弱い音で練習することをお勧めする。

以上のことを踏まえて行なうと、弓の角度は多少、向こう側に倒れることもある。しかし、そのことはあまり気にする問題ではない。大切なのは、一つ一つの粒が揃い、どんなに小さな音でも一応“しっかりとした音”になっていなくてはいけないということである。

しばしばクレッシェンドで、アップ・ボウ、つまり弓先から奏することがある。そのときにはやはり少し弓を倒し、つまり弓の毛が少ない状態からはじめると、飛び跳ねることもなく、スムーズに発音することができる。また、感覚としては、弓をヴァイオリンの方に持ってくるという意識だけではなく、ヴァイオリンを弓の方に持ってくる、というような感覚を持つことも役に立つ一つの方法である。

これらのことを試し、自分の技術に加えていってください。

イザイ Eugène Ysaÿe (1858~1931) ベルギー
エクスタシー EXTASE Op.21

1853年の初め、53歳のブリュッセル音楽院教授、アンリ・ヴュータンがリエージュの町を歩いているとき、一軒の家から彼の「協奏曲第4番」の素晴らしい演奏が聴こえてきた。彼は思わずその家のドアをノックしていたが、これが当時15歳のイザイと生涯の師ヴュータンとの出会いであった。

彼は初見や暗譜の優れた持ち主で、たくさんの弟子を育てたが、後に設けられたイザイ国際コンクールは、現在のエリザベト王妃国際音楽コンクールである。

作品は、「無伴奏ソナタ」を中心に数多くの小品を書いている。今月から取り上げる、官能かつ、瞑想的なタイトルである「エクスタシー」は、その曲の始まりこそ静かであるが、次第に高まりを見せ、エクスタシーの頂点が訪れる。やがて官能の波は静かに引いていく。音楽の運び方、音程の取り方など、かなり高度な技術を要する大人の曲である。かの有名なダヴィッド・オイストラフの愛想曲であった。